

# 探訪 北の風景 35

## 函館漁港 函館市

青木和弘

「函館市の「湯川」電停から市電の「函館とつく」前  
行きに乗り、ゴトゴト揺られながら、札幌に比べ  
るとずいぶん積雪が少ない函館の街を眺める。40  
分ほどで終点に着いた。そこから道なりにのんび  
り5分ほど歩くと漁港に出る。地元の人が「入船  
（いりふね）漁港」と呼ぶ函館漁港だ。集魚灯を  
連ねたイカ釣り船が集結する港である。活イカの  
取り扱ひ量が全道一だ。だが、函館名産のマイカ  
漁は6月からで、1月から5月まではヤリイカの  
季節。今年はまだ、宮城県石巻などに少し水揚げ  
があるばかりで、道南に姿はない。2月半ばの昼  
間、日差しはあっても身が凍えた。港に釣り人も



観光客の姿もなく、カモメが2羽、静かに舞うだ  
けだった。

ここに日本の近代港湾工事の記念すべき防波堤  
がある。1899（明治32）年に完成した「函館  
漁港船入洞（ふないりま）防波堤」で、土木学会  
選奨土木遺産に指定されている。完成から110  
年以上も経過し、傷みが目立つようになっていた  
ので、2012年から2年間で補強復元工事  
が行われた。この堤防の両端の灯台はコンクリ  
ート製で、現在は使われていないが、欠損してい  
た部分が補修されている。

実はこのコンクリート、いまでは、セメントに  
砂や砂利と水を加え、かき混ぜて作ることはよく  
知られ、マニュアルも出回っているが、この当時  
は世に出たばかりの新素材だった。大変高価なう  
え、どういう調合をすれば強度が増し海水に耐え  
られるのかなど、客観的なデータがなかったとい  
う。では、どうして100年間に上も風雪に耐え、  
強大な台風の波力をしのご丈夫な堤防を造ること  
ができたのだろうか。そこには、当時、札幌農学  
校の教授で、函館港湾改良工事を率い、後に東大  
教授となった「近代土木・港湾工学の父」と呼ば  
れる廣井勇博士の業績があったという。廣井博士  
は、この港湾改良工事の調査段階でコンクリート  
の強度試験を実施している。原料のセメントの性  
質を見極める試験方法も開発した。さらに、火山

函館漁港には集魚灯を連ねたイカ釣  
り船が集結する。



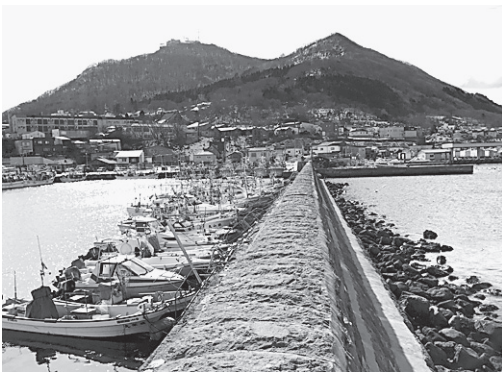
灰を配合するこ  
とで海水に強い  
コンクリートの  
製造方法も確立  
し、コストを大  
幅に削減して、  
コンクリート工  
法の飛躍的な発  
展をもたらして  
いる。

堤防の基部に  
コンクリート塊  
を据え付け、間  
知石積み工夫  
など日本の伝統

工法を生かして石材を積み上げ、要所をコンク  
リートで固めたという。その際に使ったセメント  
は、函館の隣町、上磯（現・北斗市）で営業を開  
始して2年目という、まだ国内でも数少ないセメ  
ント工場（現・太平洋セメント）の製品だった。工  
事では、屈強な石工に潜水を熟練させ、自らも現  
場でコンクリートを練って作業を指導したという。  
函館漁港の隣に造船所の「函館とつく」がある。  
ここには明治の中ごろまで「弁天台場」という砲  
台があった。江戸幕府が外国船の襲撃に備えて  
造ったものだが、1869年（明治2年）の箱館  
戦争で、新撰組などの旧幕府軍が立てこもり、新  
政府軍と激しい砲撃戦を交わした。新政府軍の海  
からの砲撃と、入舟町側から上陸した部隊の挟み  
撃ちに遭って旧幕府軍は孤立。一隊を率いて救出



1899（明治32）年に完成した「函館漁港船入澗（ふないりま）防波堤」は土木学会選奨土木遺産で、江戸幕府が外国船の襲来に備えて造った砲台「弁天台場」の石垣の石材が再利用されている。



函館漁港船入澗防波堤からの眺め。ここは活イカ取引量が全道一で、湯川温泉の宿などに提供されている

に向かった土方歳三は、このときの市街戦で狙撃され命を落としている。

そんな歴史がある弁天台場に使われていた石垣の石材が、この土木遺産の防波堤などに再利用されている。弁天台場は埋め立てられ、造船会社「函館船渠株式会社」（現・函館どつく）の、1万トン級の「第1乾ドック」が1903（明治36）年に完成し、いまも使われている。函館どつくの工場の側まで来ると、金属を加工するかん高い音が響いていた。

まだ、函館で活イカが食べられないなら、何がおいしいのか、函館自由市場（函館市新川町1の2）で聞くと、「いま、ニシンがよく捕れてるよ。この時期はゴツコ、マス、タラ、ババガレイが人気かな、刺し身はソイやヒラメがおいしい」と教えてくれた。函館にはいつもおいしい魚介がある。